

追悼 川崎勝教授

本学部の現役教授である川崎勝先生が、令和7年6月24日に永眠されました。

哀悼の意を表して、ここに有志の方々からの追悼文、そして先生の研究業績を掲載いたします。

川崎勝先生を偲んで

川崎先生がお亡くなりになり、「科学技術史」や「科学技術社会論」といった学問を教授できる人材が、いかに貴重であるかを実感し、反省と感謝の念につきません。当該分野の体系をできるだけ国際総合科学部のカリキュラムに組み込もうとされていたことが、門外漢の私にも伝わってきます。また、思い起こせば10年前、国際総合科学部の設立にも深くかわられました。その後、学部長も務められ、今なら私にもその苦労がわかります。ご体調を崩されてからも、新しく再編した大学院人間社会科学研究科共創科学専攻の入試委員長として精力的に活動されました。研究科長としてご体調を心配しつつも、元気の源になるならば“ぜひ”とお願いしたことに後悔はありません。優秀な学生を確保するための仕組みと職員の業務負担の軽減も考慮した新しい入試の仕組みを構築し、さらに改良を加えようとしていたさなかのご退任、周りの職員も残念でなりません。今後、先生が抜けられて大きく空いてしまった穴を、どのように埋めていくのかは大きな課題です。人材不足の状況もあり、困難を極めるかもしれません。しかし、先生の志は失うことなく今後も国際総合科学部、人間社会科学研究科で受け継いでいく所存です。

生物学に興味を持ち、細胞分裂の仕組みを学んだ私は、誰よりも生物の死は必然であり客観であると捉えています。しかし先生がおられなくなった後、ふとした瞬間に先生の笑顔が浮かび、どうしても客観では捉えられない無念さが残ります。学部設立から長い間お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

(杉井 学)

川崎勝先生に初めてお目にかかったのは、先生が教授になられる前の頃と記憶しております。その後、15年近くお付き合いをさせていただきました。

今年(2025年)3月にご病状をお聞きし、授業等の相談を受けました。先生には安心して治療に専念してもらいたいという思いがあり、できる限りお手伝いするつもりでした。話し合いにより、6月からの講義(グローバルヒストリー概論)は治療の様子を見て私がいつでも代講できる形としました。

5月下旬、川崎先生は私の研究室に来られました。グローバルヒストリー概論はやはり自分がやるから大丈夫だと言いに来たのです。その時、だいぶお痩せになっており、服がぶかぶかでした。やりたいことは曲げないというのはこれまでのお付き合いでわかっていたので、反論するのはやめました。椅子に座り、他にもいろいろなことを語りました。

状況は良からぬ方向に行きました。第1回の講義後に体調を崩され、第2回は休講となり、その時点で私の代講が決まりました。安心して治療に専念して回復してもらおうと私も奮起しました。第3回を終えて、翌週に向けてもっとわかりやすく学生に伝える方法を検討し、講義のスライドを作っておりました。その矢先に訃報を聞きました。

その後は、スライドの準備をしている際に、ため息ばかりついてました。先生に安心して回復してもらうために代講に手を挙げたのですが、張り合いがなくなりました。テキストを読むと川崎先生だったらエンドレスに話すだろうと思う箇所が出てきます。先生が学生に伝えたかったことを読み解きつつ、なんとか講義をやり通しました。

感謝します。どうか安らかに。

(阿部 新)

川崎先生とは、10年以上前の国際総合科学部の設置の準備段階からお付き合いがあり、川崎先生には大学教育の動向などを教えていただきながら、他の教員と一っしょに学部の設置を進めました。学部設立後は、特に2021、22年度は、川崎学部長のもとで副学部長として共に学部の運営に関わりました。その中でお世話になったことや助けられたこともあるのですが、ここではその話ではなく、川崎先生との日常的な会話の中で興味深かったことに触れたいと思います。

ボーンでたまたま川崎先生と会って、一緒に昼食をとることが何度もあったのですが、その時に、川崎先生から聞くことができた近現代史の話がとても印象に残っています。川崎先生の専門分野でもある科学史関係の話で、キリスト教と近代科学は、ガリレオの事例を見ると相性が悪かったように見えるかもしれないが、実際は逆で、キリスト教の考え方があったからこそヨーロッパで近代科学が発展したといった話はとても面白かったです。また、新型コロナウイルス感染症との関わりで、感染症の歴史の話もしました。新大陸にヨーロッパ人が進出したときに実際に現地の人たちを苦しめたのはヨーロッパ人の武力よりも彼らが持ち込んだ新しい感染症だったといった話や、第一次世界大戦中に流行したインフルエンザ（スペイン風邪）の被害が新型コロナウイルス感染症の比ではなかったという話を、熱く話されていたのが今でも印象に残っています。川崎先生の本当にやりたかったことはこういう研究なのだろうと感じました。そのつながりで、グローバル・ヒストリー概論の授業を最後まで自分でやりたいという思いが強かったのだと思います。

これまで本当にありがとうございました。

(北西 功一)

他なるもの、あるいは矜持

レヴィナスの哲学を引くまでもなく、他なるものが私たちの存在にとっていかに大事か。それは先生が私に教えてくださったことの一つです。実は私にとっては、先生の存在そのものが、そんな他なるものにほかなりません。人は自分とは異質なものを避けがちです。しかしそれだと成長は望めません。

たとえばモノログの意義。私は一貫してダイアログを追求してきましたが、決してそれが優越するわけではないことを先生は教えてくださいました。たとえば科学の意義。もちろん科学が重要であることは論を俟ちませんが、文系の研究者にとっての科学の意義については、軽視するきらいがありました。学際的なご研究によってその面白さを教えてくださいましたのも先生でした。

何より先生から学ばせていただいたのは、教育者としての矜持です。常に学生のことを最大限に考え、献身的に教壇に立つ。その姿を最後の最後まで見せてくださいました。私にできるのは、一教師としてただその雄姿を目に焼き付けて生き続けることだけです。

どうか、安らかにお眠りください。

(小川 仁志)

川崎勝先生と、ミュンヘンの Deutsches Museum (ドイツ博物館) にご一緒したことがある。2013 年の秋だった。当時、新しい学部を動かしていくために解決が必要な課題は山積していて、そのひとつが、交換留学先が足りないという問題だった。交渉のために、川崎先生と事務担当の西村さんと、ヨーロッパの何か所かをまわっていた。移動と交渉を繰り返す旅程のなかで、夕方までは空いた日が一日だけあったのだ。「(この博物館は)かねてからずっと訪れてみたいと願っていた、素晴らしい場所だから」という川崎先生の熱におされた。技術・科学に焦点をあわせてあり、世界的にもこの分野では頂点に位置するものだという。

川沿いの道を、3人で博物館に向かう。木漏れ日がまぶしく、足を浮き立たせるようなアコーディオンの音色が聴こえている。しかし、入場すると一転、圧倒的な質量の展示と、誰が何をした、誰が何をした、誰が何をした、という記述の羅列に圧倒される。巨大な蒸気機関と、輪切り状態になった U ボートがある。実体性への価値づけ、技術への信念のようなものを、あちこちに感じる。川崎先生は科学史がご専門だから、最初のほうでは幾つか説明して下さり、しかしそのうちに夢中になって、嘆声をもらしながら、展示に集中されていた。

知への憧憬を、生涯、手放すことのなかった先生だと思う。学生が書いたレポートに対しても、知的な輝きのあるものを見つけると感嘆せずにはいられなかった。2020 年「歴史学」レポートの採点講評が手元にある。最後に優秀レポートがついていて、こんな言葉が書いてある——「以上紹介した 3 名の論述は、わずか 8 回の講義を元に大学新生が記したレポートとしては極めて高い水準にあると思います。教師冥利に尽きます」。

大学教員としてとるべき姿勢を、教えていただいたように思います。
ありがとうございました。どうか安らかに眠りください。

(山本 冴里)

川崎先生とは国際総合科学部ができる前のワーキングからご一緒していました。「国際」をテーマとした新学部構想がなかなか進まなかった時、川崎先生がメンバーとして入られ、「設計科学」というエッセンスを構想に入れられました。そこで国際×科学×デザインという現在の学部の基礎が出来上がりました。そこからはあつという間に学部新設への動きが加速し、驚いたことを覚えております。また、ご専門外の分野においても博識で、中教審答申や学習指導要領を全て把握された上で学部のために動いておられました。世界におけるCEFRの動きにもいち早く気づかれ、語学の卒業要件の変更に踏み切られました。このように先見の明をお持ちの先生でした。残念でなりません。

性格は優しく、少し寂しがり屋の先生でした。私がよく昼食をとるのを忘れていることに気づかれてから、時々学食に誘っていただき、お昼ご飯をご一緒していました。ご家族を心から愛し、奥様を誇りに思い、お子さんのことをいつも気にかけておいででした。我が家にたくさんいるカブトムシの幼虫をもらってくださり、大切に育ててくださいました。そのカブトムシは今は奥様が育ててくださっていると伺っています。

本当にお世話になりました。川崎先生がおられないことが今でも信じられません。ご冥福を心からお祈り申し上げます。ありがとうございました。

(永井 涼子)

川崎先生の訃報に接した際、まず胸を衝くような大きな驚きが走り、その後に深い悲しみが押し寄せてまいりました。闘病のご様子を拝察しつつも、設立まもない大学院の入試委員長としての重責をはじめ、学部の運営に力を尽くしておられた先生のお姿を思うと、今なお言葉にならぬ思いがございます。

本学部への採用面接の折、川崎先生から温かい言葉をかけていただいたことを、今でも鮮明に覚えております。そのひと言は、私が本学部に着任する決意を大きく後押しするものであり、先生の優しいまなざしと穏やかで思いやりに満ちた語り口は、その後の教員生活においても折に触れて支えとなってまいりました。学生や教職員を分け隔てなく包み込むような柔らかなご対応は、多くの方々に深い安心感と尊敬の念をもたらしたと存じます。

学部長としてご尽力いただいた期間は、まさに未曾有のコロナ禍と重なり、大きな心労を抱えながら学部運営を導かれた日々であったと存じます。それでもなお、学生の学びを第一に考え、アカデミックライティングの指導や推薦図書の編纂など、教育の本質を見据えた営みに心を注がれていた先生のお姿は、今も私の胸に深く刻まれております。科学技術史の専門家として、歴史的視野の大切さや学び続ける姿勢を説かれるご様子からは、学問と教育に対する揺るぎない信念が伝わってまいりました。

川崎先生が示された誠実な学問探究の姿勢と、学生一人ひとりに寄り添う温かいお心を、私はこれからも大切に受け継いでまいります。安らかなご永眠を、心よりお祈り申し上げます。

(村井 礼)

本誌『山口大学国際総合科学部研究紀要』は、学部の研究推進委員会が編者となって作成しています。今年度が創刊2年目に当たります。従って、創刊号を出したのは2024年度になります。実際の発刊は2025年3月でしたので、2024年4月からすぐに発刊の作業に取りかかりました。

そうは言っても、一つの雑誌を出すためには、非常に多くのことを研究推進委員会で議論しなければなりません。投稿規定や執筆要領はもちろんのこと、表紙等のレイアウトも決めなければなりません。タイトルはどうするのか、研究紀要なのか、研究論叢なのか、別のものなのか。表紙の色はどうするのか、紙質はどうするのか等々。すべてを私の好みで決めるわけにもいかない、委員会のメンバーにも意見を求めなければならない。なかなか決まらない状態が続きました。

そのとき、メンバーの一人であった川崎先生が、「研究紀要にしましょう」「色は青っぽいのがいいのではないのでしょうか」と発言してくださいました。そうです、本誌のタイトルと色は川崎先生の御提案なのです。

なんのことはない、単なる会議の一場面です。なのに、なぜか、その情景を思い出すたびに、ほんの少しだけ心が温くなるのです。ありがとうございました。

(有元 光彦)

川崎先生と初めてお会いした時のことは、今でも鮮明に覚えています。新しい学部を作るという話が出た際、先生から直接その構想を聞かせていただきました。当時から先生は新学部のコンセプトに情熱を注いでおられ、その熱意には、すぐに私も引き込まれました。

学部全体、教育や学生たちへの情熱はその後も変わることがなく、私が学部長を務めていた時期、評議員としてそばで支えてくれたことは、本当に大きな救いでした。

でも、私の中にある一番強い思い出は、もっと何気ない日常の風景です。研究室が隣同士だったため、真面目な話はもちろん、とりとめのないお喋りをする機会がたくさんありました。話が脱線することも多く、先生との会話はいつも楽しく、私にとって「ほっと」一息つける大切な時間でした。

何より、川崎先生のあの独特で、明るい笑い方が大好きでした。その笑い声は、今でも私の耳の奥に響いています。

(LOEHR Marc)

研究業績

【1987（昭和 62）年】

3 月：「物質理論の歴史におけるフロギストン説の位置」, 学士論文, 単著, 東京大学教養学部教養学科第一（総合文化）科学史科学哲学分科

【1988（昭和 63）年】

9 月：「シュタール化学の原像 -- 18 世紀化学の一つの出発点」, 査読付, 単著, 『化学史研究』 vol.15（第 44 号）, pp. 119-134

【1989（平成元）年】

3 月：「社会的営為としての化学——ポスト・ニュートン時代のイギリスにおける化学の社会的位置づけをめぐって」, 修士論文, 単著, 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論専攻

【1990（平成 2）年】

4 月：「化学という営為をめぐって」, 単著, 『科学史・科学哲学』 No.9, pp. 35-45

【1991（平成 3）年】

9 月：「ラヴワジエ『化学原論』200 周年祭を終えて」, 査読付, 単著, 『化学史研究』 vol.18, pp. 137-143

【1992（平成 4）年】

10 月：「ヘイルズ研究の新視点 -- 18 世紀イギリス科学史の革新のために」, 査読付, 単著, 『化学史研究』 vol.19, pp. 159-171

【1993（平成 5）年】

7 月：『世界科学史百科図鑑 第 2 巻 15-18 世紀（バーナード・コーエン編）』, 共著（共訳）, 原書房

11 月：『世界科学史百科図鑑 第 3 巻 19 世紀（L・ピアース・ウィリアムズ編）』, 共著（共訳）, 原書房

【1994（平成 6）年】

1 月：「夢を追った科学者たちの物語」, 単著, 『化学』 第 49 巻, pp. 29-32

4 月：「物理教育に関する私見」, 査読付, 単著, 『日本物理学会誌』 vol.49, pp. 392-394

12 月：「環境教育との出会い」, 単著, 『山口大学環境保全』 No.10, pp. 31-33

【1995（平成7）年】

- 1月：『科学史の事件簿』，共著，朝日新聞社
担当：第5章「師デーヴィとの愛憎——マイケル・ファラデー」(pp. 49-58)
- 7月：『科学と国家と宗教』，共著，平凡社
担当：第2章「ニュートン主義と社会的営為——ヘイルズにおける自然探求の社会的位相」(pp. 37-56)
- 7月：「STS リテラシーと科学技術リテラシー」，単著，『日本科学教育学会 年会論文集 19』，
pp. 65-66
- 12月：『縛られたプロメテウス——動的状态における科学（ジョン・ザイマン）』，共著（共
訳），日本シュプリンガー・フェアラーク

【1996（平成8）年】

- 2月：「教養教育へのバイオエシックス的主題の導入の試み」，単著，『山口大学教養部紀要
（人文科学篇）』第29巻，pp. 31-53

【1997（平成9）年】

- 7月：「遺伝子技術の『社会的受容』へ向けて」，単著，『ばんぼう』No.193，pp. 36-39
- 7月：「『医療環境論』カリキュラムの構築と実践」，査読付，単著，『山口医学』46，p. 258
- 7月：「科学教育と意思決定」，査読付，単著，『日本科学教育学会 年会論文集 21』，pp. 15-
16
- 10月：『科学技術時代への処方箋』，共著（編著），北樹出版
担当：「まえがき」(pp.4-5)，第4章「現代社会における医学・医療と人間の誕生と
死」(pp.60-83)，第10章（最終章）「高度科学技術社会をひとりの生活者として生
きるために」(pp.190-206)

【1998（平成10）年】

- 3月：『惑いのテクノロジー』，共著，東洋館出版社
担当：第10章「『クローン』と『遺伝子』——何が問題か？」(pp. 151-162)

【1999（平成11）年】

- 3月：『科学が作られているとき——人類学的考察（ブルーノ・ラトゥール）』，共著（共訳），
産業図書
- 10月：『近代錬金術の歴史（アレン・G. ディーバス）』，共著（共訳），平凡社

【2000（平成12）年】

- 3月：『医療学総論—ケアを科学する』，共著，金原出版
担当：第1部第1章「歴史における科学と医療」（pp. 16-27）
- 3月：『科学が問われている—ソーシャル・エピステモロジー（スティーヴ・フラール）』，
共著（共訳），産業図書
- 7月：『科学史の事件簿（新版）』，共著，朝日新聞社
担当：第5章「師デーヴィとの愛憎—マイケル・ファラデー」（pp. 53-64）

【2001（平成13）年】

- 10月：「いのちとモノのはざままで—近代生命科学の文化的基底」，単著，『科学の文化的
基底(II)』（国際高等研究所報告書 2001-005），pp. 121-133

【2002（平成14）年】

- 8月：「客観的臨床能力試験での医療面接における評価の差の問題について」，査読付，共著，
『医学教育』33(4)，pp. 209-214
- 8月：「山口大学医学部における電子シラバスと教育評価システム」，査読付，単著，『日本
教育情報学会年会論文集』18，pp. 10-11
- 11月：「山口大学医学部における電子シラバスを用いた医学教育体制の構築」，査読付，
単著，『医療情報学連合大会論文集』22，pp. 795-796

【2003（平成15）年】

- 3月：『ハイテク社会を生きる』，共著（編著），北樹出版
担当：第7章「病院：2つの世界の邂逅の場」（pp. 138-154），第9章（最終章）「そ
して，科学技術社会を生きる」（pp. 164-176）
- 11月：『基礎臨床技能シリーズ 医療面接技法とコミュニケーションのとり方』，共著，
メジカルビュー社
担当：「医療面接：どう学んだらいいのか」（pp. 20-33）

【2004（平成16）年】

- 2月：「『学力』の「多様化」に関する小考察」，単著，「『未来学力』の構想および入学試験
問題のあり方に関する学際的研究」（平成14～15年度科学研究費補助金〔基盤研究
(C)(2)〕研究成果報告書），pp. 117-121
- 3月：「ITを用いた医学部学士編入学 AO入試受験生サポートシステムの試み」，査読付，
共著，大学入試研究ジャーナル（14），pp. 93-99
- 8月：「医療面接における教員と模擬患者による学生評価について：山口大学医学部におけ

る3年間の検討」, 査読付, 共著, 『医学教育』35(4), pp. 229-234

【2005（平成17）年】

5月: 「ネット社会を生きる子どもたちへの学校の役割」, 単著, 『学術情報研究』通巻184号, pp. 11-14

【2006（平成18）年】

3月: 「医学部学士編入学者選抜のための総合試験の開発とその評価」, 査読付, 共著, 『大学入試センター研究紀要』35, pp. 49-108

4月: Evaluation of Medical Interviews Observed in Japanese Medical School OSC Examinations (日本の医学部の客観的臨床能力試験における医療面接の評価), 査読付, 共著, General medicine 7(2), pp.53-60

10月: 「メディカルスクール構想と入学者選抜方法」, 査読付, 共著, 『医学教育』37(5), pp. 285-291

【2007（平成19）年】

4月: 『科学論の实在—パンドラの希望 (ブルーノ・ラトゥール)』, 共著 (共訳), 産業図書

6月: 「患者の個人情報医学教材に使用するにあたってのガイドライン委員会案」, 査読付, 共著, 『医学教育』38(3), pp. 173-177

【2009（平成21）年】

4月: 「臨床的問題とサイエンスショップという取組み——科学的問題との対比から」, 単著, 『サイエンスショップにおける臨床研究の可能性に関する基礎的研究』(第16回ファイザーヘルスリサーチ助成財団研究成果報告書)

7月: 『新基礎臨床技能シリーズ 医療面接技法とコミュニケーションのとり方』, 共著, メジカルビュー社
担当: 「医療面接: どう学んだらいいのか」(pp. 30-43)

【2010（平成22）年】

4月: 「卒前の臨床実習における診療録作成法の指導経験: 医学生はなぜPOMRが書けないのか」, 査読付, 共著, 『医学教育』41(1), pp. 47-50

4月: Comparison of the Usefulness of Narrative Scenarios and Case-report Scenarios in Problem-based Learning Tutorials in Undergraduate Medical Education (医学部卒前教育の課題解決型学修テュートリアルにおけるナラティブ型シナリオと症例報告型シナリオの比較), 査読付, 共著, Med Educ 41(2), pp. 95-102

7月: 「シラバス・スタディガイド」, 査読付, 単著, 『医学教育白書2010年版』(『医学教育

別冊』), pp. 58-60

【2012（平成24）年】

5月：『平成23年度（2011年）医学教育カリキュラムの現状』, 共編著, 全国医学部長病院長会議

6月：「医学教育情報館(MEAL)の構築プロセス」, 査読付, 共著, 『医学教育』43(3), pp.215-220

【2014（平成26）年】

5月：『平成25年度（2013年）医学教育カリキュラムの現状』, 共編著, 全国医学部長病院長会議

【2016（平成28）年】

5月：『平成27年度（2015年）医学教育カリキュラムの現状』, 共編著, 全国医学部長病院長会議

【2018（平成30）年】

3月：『グローバル社会における日本の大学教育：全国大学調査からみえてきた現状と課題』, 共著, 東信堂

担当：「教育目標・アセスメント・教育実践の一貫したカリキュラムデザイン」

(pp. 164-180)

5月：『平成29年度（2017年）医学教育カリキュラムの現状』, 共編著, 全国医学部長病院長会議

【2020（令和2）年】

5月：『2019年（令和元年）医学教育カリキュラムの現状』, 共編著, 全国医学部長病院長会議